

薬剤部 DI ニュース

●熱中症について

熱中症とは高温多湿な環境で、体内の水分や塩分のバランスが崩れたり、体温調節機能がうまく働かないことにより、体内に熱がたまり、筋肉痛や大量の発汗、さらには吐き気や倦怠感などの症状が現れ、重症になると意識障害などが起こります。気温が高い、湿度が高いなどの環境条件と、体調不良、暑さに体が慣れていないなどの体調による影響が重なることにより、熱中症の発生が高まります。熱中症は屋外で活動しているときだけでなく、室内で特に何もしていなくても熱中症を発症し、救急搬送されたり死亡する事例が報告されています。

●熱中症を発症しやすい人

高齢者、基礎疾患を持つ人、多剤服用者、肥満などは熱中症を発症しやすいため特に注意が必要です。高齢者では、加齢によって水分量が減少しています。のどの渇きを感じなくても脱水が進行している場合が多く、夜間の就寝中の脱水を予防することが重要です。薬の中には脱水や低ナトリウム血症が起こりやすくなったり、体温調節に影響を及ぼすものもあり熱中症のリスクとなるため注意が必要です。

体温調節に影響を及ぼす薬剤

■皮膚からの熱放射障害

抗コリン作動薬（発汗抑制）：抗コリン薬、抗ヒスタミン薬、三環系抗うつ薬等

■心機能低下


心拍出量低下：抗不整脈薬、β遮断薬、Ca拮抗薬等

■視床下部機能抑制（体温調節に影響）

抗精神病薬：フェノチアジン系薬（クロルプロマジン等）、ブチロフェノン系薬（ハロペリドール等）

●熱中症の分類と症状

熱中症の分類は、軽いほうからⅠ度、Ⅱ度、Ⅲ度と3つに分類されています。これは障害を受けた臓器数と医療機関での治療の必要性から重症を表したものです。Ⅰ度は、めまい、立ちくらみ、こむら返りなど、軽い脱水症状や電解質異常による症状があるもので、現場の応急処置による対応が可能な群です。Ⅱ度、Ⅲ度は、意識障害や臓器障害が疑われ、医療機関での治療が必要とされる群です。

分類	症状	重症度
Ⅰ度	めまい・失神 「立ちくらみ」という状態で、脳への血流が瞬間的に不十分になったことを示し、“熱失神”と呼ぶこともあります。 筋肉痛・筋肉の硬直 筋肉の「こむら返り」のことで、その部分の痛みを伴います。発汗に伴う塩分（ナトリウム）の欠乏により生じます。これを“熱痙攣”と呼ぶこともあります。 大量の発汗	
Ⅱ度	頭痛・気分の不快・吐き気・嘔吐・倦怠感・虚脱感 体がぐったりする、力が入らないなどがあり、従来から“熱疲労”“熱痙攣”と言われていた状態です。	
Ⅲ度	意識障害・痙攣・手足の運動障害 呼びかけや刺激への反応がおかしい、体にガクガクとひきつけがある、真直ぐ走れない・歩けないなど。 高体温 体に触ると熱いという感触です。従来から“熱射病”や“重度の日射病”と言われていたものがこれに相当します。	